

今堀義教授の「自己」の探求が コミュニケーション研究に遺した影響

宮 原 哲

今堀義は、1997年10月に西南学院大学文学部外国語学科英語専攻に教授として加わった。彼が大学院の学生時代から、多くの論文や学会発表などの研究活動を通して一貫して探求してきたのは、彼自身の「自己」である。同時に今堀は、シンボルという、人間にのみ与えられた道具、能力を使って他者との関係の中で築く、そして気づく「自己」の存在論的、認識論的特質を追い求めてきた。本論では、今堀が自らの異文化体験から周囲の人間との「自己の交渉」(identity management)を通して得たこと、さらに現代のコミュニケーション研究において最も重要、かつ基本的とされる「自己」の概念を哲学的、科学的にとらえようとした研究者としての足跡を振り返ってみたい。

「コミュニケーション」は現在でも、「ふれ合い」、「自分の気持ちを相手に伝えるための道具、技術」、あるいは「人間関係を築くための能力」といった、比較的表面的な捉えられ方が巷ではもちろん、社会科学、人文科学を含む他の学問領域でさえ一般的である。確かに道具、技術、スキルといった目に見える側面も含まれるし、いくら知識や態度といった、行動の基盤を磨いても、それが実践できなければ「コミュニケーションが上手」という結果は導けない。しかし、今堀も私もこのような表面的なコミュニケーションの捉え方に対して強い反発心を抱いてきた。そしてその反発心こそが、「コミュニケーションは自己、自分を形成するプロセス、つまり生き方、哲学である」という考え方を共有させたのだと信じている。

小論では、今堀自身が米国での体験を通してどのようにしてコミュニケーション学の真髄である「自己」の問題に到達し、その追求が彼の研究にどのような影響を与え、そして研究者としてのそれらの個人的、知的探求がコミュニケー

ション研究に遺してくれた大切なものに光を当てる。今堀義教授の知的貢献については、自身が会長を務めていた日本コミュニケーション学会編、『ヒューマン・コミュニケーション研究』(印刷中)に本論の一部も含め、詳細が掲載されるので参考にされたい。

今堀教授の「自己」の探求の学問的背景と概要

日本でコミュニケーション研究が本格化した時期を明確に示すことは困難だが、今堀のサンフランシスコ州立大学での前任者、バーンランドによる、日本人と米国人の自己開示に関する大規模な研究を基に著した、*The public and private self in Japan and the United States* (1975) がその一端を担っていることは間違いない。今堀がオハイオ大学で執筆した修士論文、*An investigation of oral communication apprehension among Japanese college speakers of a second language* (1982) にも、バーンランドが述べている「日本人は自分のことを、言語面でも非言語面でも友人、恋人、家族、知人に開示する度合いと頻度が、米国人に比べて極めて低い傾向がある」という、ステレオタイプとも思える、しかし同時に真実に近い主張の影響が見られる。

その当時、多くの日本人コミュニケーション研究者（と言っても数十人）に歯がゆい、悔しい思いをさせたのが、「日本には西洋レトリックの伝統がない。したがって日本人は『説得』の術を知らない」という主張をした、Morrison (1972) が日本をレトリック不在の文化 (rhetorical vacuum) と呼んだ論文、*The absence of a rhetorical tradition in Japanese culture* であった。古代ギリシャのアリストテレス、プラトン、古代ローマにあってはキケロ、クィンチリアヌスなどによって展開されたレトリックの知識や実践の伝統がない日本人には、人の心を動かす方法が身につけていないし、またそれを体系的に教育、啓蒙、訓練しようとする社会の動きもないという偏った、自文化中心的主張に、私たちは一様に反感を抱いていた。

そんな中、バーンランドや、今堀が国際基督教大学に在学中、客員教授として教鞭をとっていたジョン・コンドン教授（現ニューメキシコ大学名誉教授）

などの「親日派」に影響を受け、今堀は学部学生時代から、日本人による日本のコミュニケーションの特徴の理論化というテーマに関心を持っていたことがうかがわれる。ここで言う親日派とは、単に日本文化の表面的な部分に関心を寄せるような人たちではなく、個人的で、科学的根拠の薄い印象などによって日本文化、日本人のコミュニケーション行動の特徴を決めつけることに批判的な立場をとっていた人たちを指すことは言うまでもない。

欧米の学者による研究や理論構築が大勢を占めるコミュニケーション学の世界で、このような「反発心」によって今堀の研究意欲が高められたことは事実である。しかし、53歳という、研究者、哲学者としてはようやく熟練の段階に差し掛かったところで生涯を終えたことにより、研究者としての目的達成への道のりはその半ばで絶えてしまった。以下、学生、大学教員として米国で長期間にわたって生活した頃から、帰国後の研究者としての活動を通して、彼自身の「自己」、そしてコミュニケーション研究者が対象とする「自己」の探求の過程でどのような疑問を抱き、それがコミュニケーション研究に与えた影響について考察する。

今堀教授の「自己」探求の発端：米国滞在期間中の足跡

今堀義は「異文化コミュニケーション」の専門家、また授業の担当者として英語専攻に採用されたし、彼自身が所属していた学会や講演活動などでも異文化コミュニケーションの専門家として知られていた。しかし、今堀の研究者としてのアイデンティティは異文化コミュニケーションという狭義の研究領域ではなく、「コミュニケーション哲学者」とでも言うべき、もっと広義のコミュニケーション学の領域で、大所高所から学問分野を鳥瞰することができる立場を目指していた。

たとえば、近著「/bunka/を『語る』ことの弁証法的問題」(2009)の中でも、多くの存在論や認識論が展開され、議論されることによってコミュニケーションや「文化」の本質的理解を可能にすることこそが、研究者としての役割である、と述べている。今堀は、どのようにしてメッセージを発したり、受容

したりすれば効果的な、また効率的な異文化コミュニケーションが可能になるか、という表面的な問題にだけ取り組むのではなく、人間がシンボルという道具を使って、自己を、また自己が属す団体や組織を政治的に分離したり、融合したりする過程そのものに深い関心を抱いていたと言える。

そのような学術的、哲学的関心を追求する視点が今堀の中に生まれたのは、オハイオ大学大学院コミュニケーション学専修で修士号、博士号取得に向けて勉学に励んでいた頃からと推察される。*An investigation of oral communication among Japanese college speakers of a second language* (1982)と題される修士論文では、当時米国におけるコミュニケーション研究の推進力として大きな影響力を与えた、マクロスキーらの実証主義的、決定主義的哲学に端を発する「コミュニケーション不安」(communication apprehension)に対する批判が展開されている。

米国のように多様な文化が混在し、どのような状況でも、またどのような相手にも自分の考えを明確に示すことが優れたコミュニケーション力と考えられている文化では、人前で自分の意見を述べたり、見知らぬ人に話しかけたり、初対面の人と自由に会話を進めることに強い不安や恐怖心を抱くことは、「治療」が必要な一種の病的兆候とさえ考えられている。しかし、日本のように、少ない言葉から相手の気持ちを察し、行間を読み、共感し、「あうんの呼吸」で互いの気持ちを分かり合える(少なくとも分かり合った気になる)ことをコミュニケーション能力の優劣の判断基準とする文化においては、話さないこと、話しても自分の立場を明確にしないことは、むしろコミュニケーション能力が優れている、とも判断され得る。このような、欧米主導の概念や理論がそのまま日本を含む欧米以外の文化に適用され、それらの理論的水準に達成しなかったり、あてはまらなかつたりする行動や現象を「異常」、「逸脱した状態」、「能力の欠如」など、自文化中心主義的な見方をすること、されることに今堀は早くから拒絶反応を示していた。

このような「反欧米的」な学問上の議論は、Kim (2002) や Miike (2003)、世界最大のコミュニケーション学会である全米コミュニケーション学会(NCA)でも取り上げられるようになった、Asiacentrism (アジア中心のコ

コミュニケーション研究)の発表やパネルなどが増加している現状を見ても分かるように、現在では珍しいものではなくなった。これらの流れの源の一つを今堀も早くから作っていたと言える。また、Miyahara (1999, 2004)も述べているように、コミュニケーションの特徴や問題点は、それぞれの文化的、伝統的、歴史的背景の中で研究されるべきもので、背景を異とする概念や理論を他文化に押しつけるような研究は、研究倫理にも背くことである。

今堀のこのような批判的精神は、早くは博士論文の中にも明確に表れていた。既存の理論や概念、またコミュニケーション学の中での領域の分類に対しても疑問を投げかけ、挑戦する姿が目立っている。1986年に博士号(Ph.D.)を取得したが、博士論文(*A comparison of verbal behaviors and interpersonal perceptions between initial intracultural and intercultural interactions*)の中で、今堀は、「文化の違いがあるから『異文化コミュニケーションは難しい』とする前提には疑問がある。それは偏見であり、逆に『○○とのコミュニケーションが難しいのは、○○は▽▽人だから』という安易な結論にたどり着き、そのことがさらに文化的背景を異にする人たちとのコミュニケーションを困難にする。(中略)すべての個人が、性、年齢、経済・社会的身分、人種、さらに障害を持つか否か、などありとあらゆる背景を異にする可能性がある限り、どのような対人関係もある程度『異文化コミュニケーション』と言えるはず」と述べている(pp.4-5、原文は英語、邦訳は筆者。以下同様)。

このように、既存の概念、あるいは人々の限られた経験だけを基に築かれた認識の枠組みによって、種々のコミュニケーション現象や体験を分類したり、意味づけしたりする態度に強い反発心を今堀は抱いていた。その抵抗の源は、彼が米国中西部の大学で大学院生、大学講師、そして西海岸の大学で助教授、教授へと昇り詰めていった過程の中で常につきまとっていた、米国の特に白人による彼自身への差別意識にあるように思われる。異文化において自分自身が体験するアイデンティティーの変化や、その変化を周囲がどのように受け止めたり、あるいは排除しようとしたかという、一種のせめぎ合いの中で、今堀のコミュニケーション研究者としての、絶え間ない「自己」という概念の探求が芽生え、最後まで継続されたのである。

今堀の論文に頻繁に登場する、self (2006a; 2006b)、identity (2005)、それに face (1999a; 2004)、facework (2004) ということばは、彼の自己という概念への探求の多様性を示している。これらの概念は異文化コミュニケーション研究の領域ではなく、欧米の対人コミュニケーション研究から派生したもので、今堀のコミュニケーション研究の幅広さを物語っている。

研究者としての立場を確固としたものにした今堀ではあったが、彼の米国滞在初期の頃の体験は相当葛藤に溢れていたようである。異文化で長期間の生活を送るほとんどの人たちが経験することであるが、異文化適応の過程でのステップ(拒否、防衛、最小化、受容、適応、統合)を前進したり、時には後退したりしながら次第に自分の中に「第三の文化」とも呼べる、たとえば日本でもアメリカでもない、独自の文化的枠組みを構築することによって複数の文化に適応する能力を習得する。しかし、その習得までの道のりはさまざまな挑戦や脅威に溢れ、道半ばで自分の元の文化に逃避する人が多い。今堀は20年近い米国での生活を経て、自分なりに両文化への理解と適応を可能にしたように思われる。

しかし、その過程の中で、「日本人でもなければ、米国人でもない」というマイノリティーの中のマイノリティー、あるいはどちらの文化でも主流ではなく、はみ出し者としての自覚(marginality)を強く感じていたことも事実である。それは、状況によってコード・スイッチングを通して適度に両方の、あるいは複数の文化で問題なく行動できる器用さを示すのと同時に、どの文化でも「一般」の人ではなく、「その他」、あるいは「変な人」として見られたり、自分自身でそのようにしか自分を見られなくなったり、という必ずしも心地良くはない自己観を持つことにもつながる。

そのような葛藤を今堀は、「米国人になろうと努力すればするほど、私自身の日本人としての背景のおかげで自分が周囲と違っていると感じた。そして日本人になろうと努力すればするほど、自分が米国で長期間生活したおかげでいかに元の自分から変化しているかに気がつかされた」(2006a, p.262)と述べている。どんなに英語運用能力が上達し、米国人と似た行動をとっても、今堀は米国では自分が「米国人」として認められてはいないこと、また米国人として

のアイデンティティを習得することができなかったことに対する絶望感を抱いていた。

しかし、生来の負けず嫌い、完璧主義者の性格が、今堀に「何か一つのことを始めたら、とにかく最後までやり抜き、同時にそのことにおいては誰にも負けない、『本物』を身につけないと満足しないという考え方が彼を一流の研究者へと育てた」という、米国の最先端に行くコミュニケーション研究者が口を揃えて言う、「本物の学者」(Collier, 2009) という定評を与えたようである。

今堀が米国滞在中、一生の仕事として、自らが関与すべきと強く感じたコミュニケーション研究者としての責任が、「異文化コミュニケーション援助者」とでも呼ぶべき立場である (Imahori, 2006a, p.276-277)。サンフランシスコという、世界のさまざまな文化(人種、国籍だけではなく、異性愛・同性愛、障害・健常などのありとあらゆる「文化」を含む)が入り組んでいる土地に、白人の中流層が圧倒的多数を占める中西部のイリノイ州から移り住んだ時、特にそのように感じたようである。サンフランシスコ在住の日系米国人は、第二次世界大戦中受けた迫害や差別を乗り越えて、現在ではカリフォルニア州やハワイ州をはじめ多くの米国の都市で、政治、経済、文化の中心的立場で活躍するまでになった。その間の苦労や葛藤について、西南学院大学からの在外研究期間中(2001~2002年)、大規模な質的研究(Imahori, 2001b)を行い、特に異文化コミュニケーションを円滑、効果的にするために人々の認識や、異文化に対する態度変容を促進する「援助者」としての責任を感じた。

コミュニケーションのスタイルや方法を変化させることによって、異文化を含めた種々の状況で自らの人間関係を改善するということは、良心を備えた人間であれば必ず目指すべきゴールである、と今堀は考えた。人々がそのような変化を積極的に認め、自らも変化することによって、どのような人たちも自分のアイデンティティの確立を求めて、自由に自己表現し、周囲の人たちとアイデンティティの交渉をすることができるより良い社会を築くことができるのである。

そのようなコミュニケーション学に対する真摯な態度を表す一例として、NCAの年次大会でサンフランシスコに行った時のことを鮮明に覚えている。

私のゼミの卒業生がカリフォルニアに在住し、近く現地で知り合った米国人男性と結婚することにした。そのフィアンセと共に、学会会場のホテルを訪ねてきてくれて、今堀と私にその彼を紹介した。しばらく話しているうちに、その白人男性は、控えめで、男性を陰で支えてくれ、男性の思う通りに行動してくれるのが日本人女性の望ましい姿である、というような意見を述べた。この男尊女卑のステレオタイプに対して、今堀は夜中まで彼を説教し、"You can and must CHANGE."と言いつけていた。変化、改善を必要とするのみならず、今堀の学生に対する教室での態度にも如実に表れていたようである。

米国での「自己」の探求は平坦な道ではなく、時にはアイデンティティが定まらないことによって自信喪失や自己を見失うことからくる絶望感さえ感じさせるような経験を重ねたが、今堀はそのような異文化体験を「複雑な自己を探求するために行った有益で、わくわくするような異文化適応の訓練」(2006a, p.259)と位置付けている。

今堀教授の「自己」探求：西南学院大学着任後の足跡

今堀を英語専攻のコミュニケーション部門の専任教員として迎えたのは1997年10月だった。米国で永住権を持ち、コミュニケーションの学会でも次第にその卓越した研究能力と、異文化コミュニケーションの学界でのリーダーシップが認められ始めていただけに、20年近く過ごした米国を去ることは彼にとって大きな、そして苦しい決断だったようである。そして、西南学院大学着任後も彼自身の「自己」の探求に対する情熱は衰えることはなかった。

Among us (Lustig & Koester, Eds., 2006) に寄稿した一章、On living in between (Imahori, 2006b) で今堀は、自分が育った日本に帰った後経験した「自己探求」について鋭い視点で捉えている。長い時間を異文化、特に「自己」をはっきりと示すことが求められ、それを可能にする能力が高く評価される欧米文化で過ごし、日本という控えめ、平等、和を美德とする文化に帰着したのち経験する「負の適応」とも言える試練に悩む「帰国子女」と呼ばれる人たち

が勇気づけられるような示唆を次のように記している。

日本に帰り、大学のキャンパスでの生活を始めたころから私は、行動、言動、服装などにおいて人とは違うようにしようと決めた。帰国後1年位経ったころ、同僚や学生の目に私は、彼らの文化的境界線からはみ出した「一匹狼」(cultural maverick)のように映っていたことだろう。そんなイメージが定着することによって、私は自分のアイデンティティを、日本文化の範疇にとどまるべき一個人としてではなく、一匹狼として求めることができる。こうやって獲得したアイデンティティのおかげで、いくらか自由を感じることができるようになった。自分の文化の境界線を周囲の人たちと交渉するプロセスは決して終わることはない (p.276)。

「帰国子女」という特別のことばで呼ばれ、異人種としてさえ見られることに苦悩する人たちにとって、この今堀の提言は、彼が文化摩擦から得られるエネルギーを享受しながらさらなる異文化接触に向けて、何か新しいコミュニケーション能力を得る姿が垣間見られる。

それまで日本と米国という異なる文化的背景を持つ人同士の対人関係を、主に米国側から見てきただけに、今度は同じことを日本側から見てみたらどうだろう、と視点を変えることに大きな意義を感じていた。そのことによって、それまであまり話題にさえ上らなかった「非欧米の視点から捉えた人間のシンボル活動 (コミュニケーション)」という大きなテーマに今堀は関心を抱き始めた。

結局実現しなかったが、私といつか、*Japanese interpersonal communication as Japanese see it* というようなタイトルで共著しようという話もしていた。これまで、日本人のコミュニケーション、対人関係が欧米で築かれ、試され、応用された理論や概念、それに研究方法で描写、解釈、判断されてきたわけだが、そこには欧米文化の自文化中心主義的発想が見られる。欧米の研究者の傲慢な態度にも当然問題はあがあるが、他方これまで日本のコミュニケーション研究者が自分たちの文化の特徴や、それらに影響を受けるコミュニケーション

行動について、世界の研究者に理解してもらえるよう、きちんとした理論形成や議論を十分に発展させてこなかった怠慢の方がより大きな原因である、という点で私たちは一致していた。

米国から日本へ居を移した時をはさんで、今堀は精力的に論文を執筆した。そのすべてがアイデンティティ、またそれに深い関連を持つ面子交渉 (face negotiation) であった。たとえば、Imahori and Miyahara (1998) では、恋愛関係が崩壊する段階での日本人大学生による面子交渉、アイデンティティ管理 (identity management) に焦点を当てた。このような研究は米国ではそれまでも頻繁に行われてきたが、失恋という当事者にとっては暗い、重苦しい状況でのコミュニケーション行動を探るという研究は日本ではほとんど行われたことはなかった。しかし、今堀が後に述べているように、「危機的な状況だからこそ、当事者が死に物狂いになって自分の面子を保とうとする欲求や、そのためのコミュニケーション行動の特徴が如実に表れるはず」(1999a, p.129) と、研究者としての好奇心、また冷静さを表している。

その一連の研究の中で、今堀の特に目新しい視点は「コミュニケーション能力」(communication competence) の存在論に関する議論であると言える。それまで、コミュニケーション能力は個々人が持つ、知識、態度、行動に関する力と考えられてきた。しかしこれらの研究で、今堀は「能力」(competence) を対人関係、つまり人と人との間に存在するものであると位置づけている。この考え方は、宮原・今堀・オルソンが、2002-04年に科研費を獲得して行った研究、「『人間主義』の日本人のコミュニケーション」以来、今堀が絶え間なくテーマとして掲げてきた問題である。たとえば、「面子」は一人の人間が単に所有したり、失ったりするという考え方ではなく、一個人が他者とさまざまな状況の中で、シンボリックに共同構築したり、交渉したり、また協調して発展させたりする、という考え方を見出した。

人間の自己観 (self-construal) は Markus and Kitayama (1991) の研究以来、まず自分という人間がいて、その自分が周囲の人間と関係を築くという独立的自己観 (independent self-construal) と、自分という人間は周囲の人間と共に、あるいは相互に依存し合いながら個を形成する相互依存的自己観

(interdependent self-construal) の二つに大まかに分けることができると考えられている。この概念を基にこの約 20 年、日米の対人コミュニケーション、異文化コミュニケーションの領域ではたいへん多くの研究が発表されている。そして、私たちも「自己」が自分の中に存在するというより、むしろ自分と相手との間にあって、一人の人間はその都度相手と「自らの分け前」(=自分)を求めて交渉(=コミュニケーション)を行っているという、自己、そしてコミュニケーションそのものの存在論を明らかにしようとしてきた。このような研究はコミュニケーション学だけではなく、「人と人との間」(1981)を著した木村敏や、「甘えの構造」(1971)で著名な土居健郎などによって代表される、日本の精神医学とも通じるところである。このことによって、日本のコミュニケーション研究の存在、位置づけも明確になりつつある。

これらの研究で明らかになったある意外な結果が今堀の関心を引いた。それは、日本人大学生の面子行動は、それまで思われていたよりはるかに個人的、あるいは自己中心的であるということ (Imahori, 2001b)。また、それまで抱かれていた日本人男女のステレオタイプとは正反対の、「恋愛終結の状況に臨んだ際、女性の方が男性より直接的、双方向議論型のコミュニケーションを好み、男性は間接的、自己完結型戦略を好む。さらに、『何もしないで逃げる』といった、それまでの日本の伝統的背景からすると最も『男らしくない』と思える方法を多くの男性が望んでいる」というたいへん興味深い結果が明らかになった。この研究は女性と男性という、「文化」の違いによって起こる誤解や対立にも光を当てた。

これらの特徴は、それまで「何となく」わかっていたことでも、今堀がその当時行っていた緻密な統計分析を使った実証主義的研究によって科学的根拠が提供された。なぜこのような社会的変化が生じているのか、という新たな疑問点を浮き上がらせたという点で、これらの研究の発見的価値 (heuristic value) は高いと言える。さらに、日本社会における男女の性役割の変化について、今堀は学術的研究のみならず、学内外でセクシュアル・ハラスメントに関する講演、セミナー、ワークショップを頻繁に行い、「セクハラ専門家」としての一面ものぞかせていたことは周知の通りである。

今堀の研究者としての強みは、このように理論や概念を築いたり、試したり、あるいは挑戦したりという学術的な努力と、「実践」とを常に統合しようとする試みだったと言える。異文化コミュニケーション能力について多くの示唆が述べられている、そして今堀のこれまでの研究を大きくまとめた論文とも言えるのが、イリノイ時代から同僚、共同研究者として多くの論文を共著してきた、キューパック (Cupach) との編著書の一章である (Imahori & Cupach, 2005)。

その論文の中で、彼らはアイデンティティーとは自己とその周辺の世界を理解するために必要な枠組みと定義し、意識的にそれぞれの状況で自分のアイデンティティーを他と交渉するために必要なのは、自己をさまざまな側面から見ようとする「留意力」、注意力 (mindfulness) であると主張している。異文化であれ同文化であれ、コミュニケーションに関わる者が相互にアイデンティティーを協調し、共同で作り上げ、共に維持しようとする努力の結集の結果がコミュニケーション能力である (Cupach & Imahori, 1993)。

Imahori and Cupach (2005) では、両著者の鋭い観察眼も披露している。目新しい概念として、「アイデンティティーの凍結」 (identity freezing) が紹介されている。これは今堀自身が米国滞在中、特に初期に経験したことである。人は相手の肌の色、服装などの外見や話すときの訛り、アクセントなど、目立ちやすい文化的特徴によって「〇〇人」と思い込む。それらの表面的特徴だけに注意を払い、肝心の目の前の相手が発するメッセージの内容や考え方を無視したときアイデンティティーが凍結し、同時にそのことは両者にとって面子を脅かされる行動 (face threatening act) となる、と述べている。

アイデンティティー管理理論 (Identity Management Theory) の中で、Imahori and Cupach は異文化コミュニケーションにおける能力の向上に向けて次の 3 つの提案をしている。1) 相互のコミュニケーション、言語・非言語の収束 (symbolic convergence)、そして対人関係に関するルールを共に気づき、築くことによって「人間関係アイデンティティー」 (relational identity) を築き、2) 両者間の文化の違いを障害物としてではなく、プラスの要因としてとらえ、3) 個人のアイデンティティー管理と人間関係の管理は表裏一体の関係にあることを認識する。これらの提案に基づいて具体的、実践

的コミュニケーションのスキルを開発することができれば、異文化のみならず、文化的背景が類似した相手との人間関係能力の改善にも大きく貢献できることが期待される。

今堀はそれまでの数量データを統計処理して行う、実証主義的、決定主義的、仮説証明型研究 (Imahori, 1999b; 2001a; Imahori, et al 2001) から、より全体的、解釈的、そして批判的研究手法への転換を見せている。文化とコミュニケーションの研究を重ねるにつれ、研究者と研究者が対象とする文化、つまり主体と客体との関係について批判的な議論を展開した、日本コミュニケーション学会編の2本の論文が批判的研究者としての今堀の姿を鮮明に表している。

今堀義は自らの異文化適応の体験を批判的精神で観察、分析し、それを「自己」というコミュニケーション研究で最も重要な要素、概念の理解に役立てようと努力した。新しい理論を形成するだけでなく、既存の理論や概念の正当性や妥当性を確認したり、ときには問題点を追及して従来認められてきた理論に挑戦したりという、注意深く絶え間ない研究者としての態度こそが、今堀がコミュニケーション研究の第一人者として認められるようになった大きな要素である。

今堀義がコミュニケーション研究に与えた影響

前述のように、今堀義は異文化コミュニケーションの研究者というよりは、「コミュニケーション哲学者」として自らのアイデンティティーを築きあげた。それは、日本でのコミュニケーション研究に大きく分けて二つの大切なものを遺した。一つは、これまで日本でのコミュニケーション研究は、研究者の関心領域によって、レトリック、対人コミュニケーション、組織コミュニケーション、異文化コミュニケーションというように細分化され、それぞれが異なる研究哲学を持ち、さまざまな課題に取り組んでいた。しかし、今堀が会長を務めていた日本コミュニケーション学会では、この数年「コミュニケーション学とX」というテーマで、Xにあたる、演劇、文学、文化人類学、カルチュラル・

スタディーズなど、他の社会・人文科学の領域との棲み分けを明らかにすると同時に、接点を探ってきた。その学会で、今堀が展開、発議した認識論、存在論の議論の成果があり、コミュニケーション学者が、「コミュニケーションの研究とは人間の存在そのものを追求する学問である」という統一見解に近いものを持つようになりつつある。

もう一つの貢献は、スピーチ・コミュニケーション教育 (2008b, 2009) に掲載された2本の論文、「総評 - /bunka/ と研究者・教育者との主体-客体の関係」、「/bunka/ を『語る』ことの本証法的問題」の中で示した問題点と鋭い議論は、今堀が一哲学者としての一步を踏み出したことを物語っている。このことによって、コミュニケーションの研究と教育は一般に理解 (誤解) されている、「人前で上手に話す」とか、「誰とでも仲良くなれる」といったごく表面的な問題を扱う実学ではなく (もちろんその部分の具体的な示唆をすることもコミュニケーション学の一つの責務ではあるが)、人間の生き方、つまり哲学の問題点を解明しようとする学問領域という、コミュニケーション学のアイデンティティーの構築を形あるものとして後進の研究者に譲っている。

概して、新しい学問というものはその存在価値やアイデンティティーが認められるまでには多くの局面を迎えるものである。日本のコミュニケーションの学界でもレトリックや異文化コミュニケーションなどの間に長年、それらの多様性からくる、繊細な葛藤や対立が存在してきた。それぞれの領域の間に競争心やライバル意識が芽生えることは、それが学界全体の発展を目指している限り、健全な印として歓迎される。今や揺るぎない地位を確立した米国のコミュニケーション研究も、これまで多くの大学でその存在が否定されたり、邪魔者扱いされたりしたことも事実である。日本コミュニケーション学会では、細分化された領域間では「日本におけるコミュニケーション研究を促進する」という理念が明確には共有されていなかったように思われる。しかし、今堀が会長に就任したことは、その豊富な研究業績と絶え間ない「自己」の探求による成果で、コミュニケーション研究者を「人間の存在を追求する学界のメンバー」として束ねることに大きく貢献したように思われる。

今堀自身が記しているように、「コミュニケーション研究自身の存在論を確

立、明確化するのが研究者たちの責任である」(2008a)。たとえば、個人のアイデンティティーが人間関係上、また固有の文化的背景の中でどのように形成され、また共有されるのかという問題を議論することにより、レトリック研究であれ、対人コミュニケーションであれ、コミュニケーションという領域に共通の哲学的基盤を常に求めてきた。独立的自己観か、相互依存的自己観かに関わらず、「自己」という問題は私たちコミュニケーション研究者が常に向き合わなくてはいけない、最も重要な課題だからである。

もし今堀がいかにすれば上手な異文化コミュニケーションをすることができるか、という実践的ではあるが狭義の課題にだけ興味を抱いていたら、これまで繰り広げられてきた文学や文化人類学などの研究者との活発な議論は始められていなかったかもしれない。自己は他者との、「コミュニケーション」と呼ばれるシンボル行為を介して行われる関係においてのみ確立、明確化されるのと同様、コミュニケーション研究の領域も社会学や心理学、文化人類学などの近隣の領域との接点と、相違を認識してのみアイデンティティーを確立することができるのである。日本ではまだ浅い歴史しかないコミュニケーション研究が、その発展的段階にある今、学際的ではあるが独立した学問領域としての市民権を獲得する過程において、今堀の遺したものは大きく貢献したと言える。

今堀のこのような哲学的貢献を可能にしたのは、彼の多様な研究手法と、その一つひとつの底流である認識論や存在論を十分に理解しながら、複数の角度から「自己」の探求に迫ろうとした努力である。西南学院大学に着任したころは、今堀は自らを「統計屋」と呼んでいた。量的研究法を使い、コミュニケーションの過程からさまざまな独立変数、従属変数を導き出し、仮説をテストするために相関関係を探るという演繹的な研究方法を使うのが主だった (Imahori, 1999a; Imahori, 2004)。

2001年に刊行した質的研究論文が一つの転換点になったように思われる。その論文の中で、第二次世界大戦中、および戦後の日系米国人のアイデンティティーの変化や葛藤を長時間にわたる聞き取り調査で明らかにしようとした。その論文の中でも、20年近く自らが過ごした米国で、日系人からもやはり「自分たちとは違う人」という位置づけをされた衝撃のような感情に触れ、そ

のとき今堀自身の自己観がどう影響を受けたか、という問題について言及することも忘れてはいない (Imahori, 2001b)。この研究の頃から、今堀は研究者、特に異文化コミュニケーションに関心を持つ者としての自省力 (self-reflexivity) の重要性を特に強く認識するようになった。その「研究する者」と「研究される者」との対峙が主体と客体の関係という「自己」に関する大きな、そして究極的な議論への道を開いた。人間の存在について研究するコミュニケーション研究者自身も人間である以上、自らのアイデンティティーがどのように形成、維持され、発展するかももちろん、研究の対象である客体に対してどのような立ち位置を保つのか、真剣に考えなくてはならないと今堀は説いている。

このような哲学者としての地位を築き始め、日本コミュニケーション学会の会長として2年目を迎えようとした矢先、2009年7月17日、今堀義は突然この世を去ってしまった。しかしながら、今堀がコミュニケーション研究者に遺してくれた新たな視点、そして何よりも研究者としての姿勢はこれから多くの後進の研究者や教育者に受け継がれていくものと信じている。私は今堀の残任期間 (2010年5月末まで) に加え、次期 (2010年6月1日～2012年5月31日) 日本コミュニケーション学会会長に選ばれたが、彼が遺してくれたものを守るだけではなく、哲学的議論をますます発展させ、確固とした基盤の上に多くの新しい研究が始められるよう、コミュニケーション研究者の奮起を促す責を負う者として、努力したい。そのような意気込みでコミュニケーション研究に臨む者の心に今堀の強い意志が生き続けるものと信じてやまない。

REREFENCES

- 今堀 義 (2008a) 「コミュニケーション存在論と認識論の研究と CAJ」『日本コミュニケーション学会ニュースレター』89, 1
- 今堀 義 (2008b) 「総評 - /bunka/ と研究者・教育者との主体 - 客体の関係」『スピーチ・コミュニケーション教育』21
- 今堀 義 (2009) 「/bunka/ を『語る』ことの弁証法的問題」『スピーチ・コミュニケーション教育』22

- 木村 敏 (1981) 「人と人との間」弘文堂、1972年。
- 土居健郎 (1971) 「甘えの構造」弘文堂、1971年。
- 日本コミュニケーション学会 (編) (印刷中) 『ヒューマン・コミュニケーション研究』
- Barnlund, D.C. (1975). *The public and private self in Japan and the United States*. Tokyo: Simul Press.
- Collier, M.J. (2009). "In memory of Todd Tadasu Imahori." Panel presented at the annual convention of the National Communication Association, Chicago, IL.
- Cupach, W.R., & Imahori, T.D. (1993). Managing social predicaments created by others: A comparison of Japanese and American facework. *Western Journal of Communication, 57*, 431-444.
- Imahori, T. T. (1982). *An investigation of oral communication apprehension among Japanese college speakers of a second language*. M.A. Thesis, Ohio University College of Communication.
- Imahori, T. T. (1986). *A comparison of verbal behaviors and interpersonal perceptions between initial intracultural and intercultural interactions*. Ph. D. Dissertation, Ohio University College of Communication.
- Imahori, T. T. (1999a). "It's over.": Relational disengagement strategies among Japanese college students. *Studies in English Language and Literature, 40* (1-2), 155-186.
- Imahori, T. T. (1999b). Theoretical validation of intercultural communication competence in Japan: An exploratory study. *Studies in English Language and Literature, 39* (3), 25-58.
- Imahori, T. T. (2001a). Validation of identity management theory in Japan: A comparison of intraethnic and interethnic communication. *Studies in English Language and Literature, 42*(2), 25-50.
- Imahori, T. T. (2001b). Identity management of Japanese Americans between "yes-yes" and "no-no." *Studies in English Language and Literature, 41*(3), 82-120.
- Imahori, T. T. (2004). Heartbreak episodes: Comparison of face concerns and facework between terminators and recipients of termination in romantic relationships. *Studies in English Language and Literature, 44* (2-3), 129-173.
- Imahori, T. T. (2006a). On becoming "American." In M. W. Lustig & J. Koester (Eds.), *Among us: Essays on identity, belonging, and intercultural competence* (pp. 258 - 269). Boston, Pearson.
- Imahori, T. T. (2006b). On living in between. In M. W. Lustig & J. Koester (Eds.), *Among us: Essays on identity, belonging, and intercultural competence* (pp. 270 - 281). Boston, Pearson.
- Imahori, T. T., Cupach, W. R., Nonaka, A., Ide, A., Ishida, N., Tanaka, S., Yokomitsu, H. (2001, November). *Dances with faces: Japanese facework dynamics of offenders and victims in embarrassing situations*. Paper presented at the annual meeting of the National Communication Association, Atlanta, GA.
- Imahori, T. T. & Cupach, W. R. (2005). Identity management theory. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Theorizing about intercultural communication* (pp. 195-210). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Imahori, T. T., & Miyahara, A. (1999). *Problematic facework in Japan*. Paper presented at the annual conference of the International Communication Association, San Francisco, CA.
- Kim, M. S. (2002). *Non-Western perspectives on human communication: Implications for theory and practice*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review, 98*, 224-253.
- Miike, Y (2003). Towards an alternative metatheory of human communication: an Asiatic vision. *Intercultural Communication Studies 12*, 39-63.
- Miyahara, A. (1999). Examining cultural boundaries in the communication studies: The case of Japanese interpersonal competence. *Keio Communication Review, 21*, 23-35.
- Miyahara, A. (2004). Toward theorizing Japanese interpersonal communication competence from a non-Western perspective. In F. E. Jandt (Ed.), *Intercultural communication: A global reader* (pp. 279-292). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Morrison, J. (1972). The absence of a rhetorical tradition in Japanese culture. *Western Speech, 36*, 89-102.